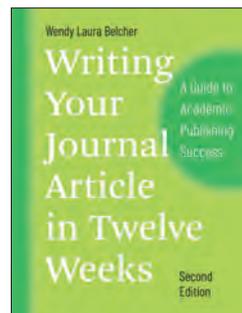


“Writing Your Journal Article in Twelve Weeks: A Guide to Academic Publishing Success” Second Edition

Wendy Laura Belcher 著

農業・農村領域 主任研究官 三宅 良尚



“Writing Your Journal Article in Twelve Weeks: A Guide to Academic Publishing Success”
Second Edition
著者/Wendy Laura Belcher
出版年/2019年
発行所/The University of Chicago Press

米国プリンストン大学のアフリカ文学・比較文学の教授であるWendy Laura Belcherによる“Writing Your Journal Article in Twelve Weeks: A Guide to Academic Publishing Success”は、国際学術雑誌で論文を出版するための「ゲームのルール」を詳述する書籍です。主な読者として米国の人文社会科学分野の大学院生や若手研究者を想定していますが、英語論文を国際誌で発表したい米国外の研究者が様々な指針を得るためにも参考になると言えます。また、『まったく新しいアカデミック・ライティングの教科書』（阿部幸大著）では、本書のタイトルを『12週間でジャーナル論文を書く』と訳し、アーギュメントの説明の中で引用しています。

本書は、2009年に出版された初版の改訂版になります。改訂には、初版に寄せられた読者の感想も反映されており、学問分野内の特定分野を対象とする米国の査読誌への出版を優先しすぎているといった批判があったことを著者は述べています。こうした指摘に答えるため、本書では、著者周辺の現状認識に加えて近年の学術出版に関する研究も参照され、両論の併記や、曖昧な点に対しては納得しやすい説明が随所に施されています。そのため、本書は信頼性を高めながら、大幅な加筆がなされる結果となりました。

具体的な構成としては、修士論文や学会発表原稿、授業で書いた小論文などの未出版の文章を、学問分野内の特定分野を対象とする米国の査読誌に投稿できるように推敲するための手順を、ルールの解説や課題を含めた各週・段階で取り組む内容としてそれぞれの章（Week 1など）に落とし込んでいます。また、査読誌の選び方や、厳しい査読意見への対応といった論文の採択に向けて重要になる点にも触れられています。

本書では、論文が不採択になる理由を複数取り上げていますが、そのなかでもアーギュメントの不十分さ・欠如を第一に挙げ、最重視しています。アーギュメントとは、「相手を納得させる話し方」（本書66ページ）で、相手が「本当にそうなのかと思っていること」に向き合い、それに「答える根拠」もあわせて伝えることです。本書ではWeek 2の章を割り、問題点の記述との違いなど、アーギュメント

を成立させるための条件を包括的に示しています。そして、アーギュメントの書き方についても分かりやすく提示しています。こうした構成は、アーギュメントを書く際には感覚的な調整や、慎重な確認が必要であることを暗示していると言えます。つまり、アーギュメントを明示し、一貫した査読論文を書くことを伝えることはやはり簡単ではないことをうかがわせています。

同様に、気づきにくい点がパターン化されているところも、本書の強みになります。例えば、既存研究との関連付けの書き方を3タイプ、研究の重要性の示し方を10タイプに分類しています。ゆえに、論文執筆から査読意見への対応まで、断片化された考えや疑問点の多くを整理し直すうえで、本書は非常に適していると言えます。

本書を通じて、論文執筆が孤独な営みではないことも強調されています。ほとんどの章で、関連する内容について研究者仲間と話をする課題が設定されており、想定される読者の批判に向き合う箇所でも、著者が軽快な文体を保っている姿勢には感心させられます。また、引用が特定の研究者グループに偏ったり、少数意見や海外の研究が引用から漏れたりすることを防ぐため、引用価値（Citation Value）についても議論されており、倫理的な研究のあり方の現在地を感じさせます。

このように、400ページに及ぶ本書は、国際学術誌への投稿に必要なルールを網羅的にわかりやすく記述しています。このため、若手研究者や、研究プロジェクトに従事する研究者が国際発信に向けて論文執筆から投稿に至るルールを確認する際に有用です。そして、アーギュメントを通じた発信は国際的な議論の基礎にもなるため、本書は国際的な政策枠組みをめぐる議論を海外の研究者と行う際にも有益となります。

※書影の使用については、The University of Chicago Pressから許可をいただきました。感謝申し上げます。